外書講読Ⅲ

　ケネディー政治の反核運動はペンタゴンに至り、NATOの費用のかかる原子力によらない力を確立することによって、ヨーロッパでの核による防衛への依存を減らすために1962年マクナマラはケネディー大統領と運動を始めた。２年間ずっとマクナマラは、アイゼンハウワーとドルスが表していた見解での核兵器は全く使用に適していないと連想してきた。確かに、1962年のとても不快な10月はケネディーの重要な助言者数人とケネディー自身の核兵器に対する反感を与えた。

　アイゼンハウワーとケネディージョンソンの核兵器に対する姿勢の相違は1964年9月のジョンソンの声明にみごと要約されている。“間違いを犯してはならない。通常核兵器のようなものはまったく無い。危険でいっぱいだった19年間、他国に対して原子を使うと態度で示した国は無かった。今、そのようにする事は最も横柄な要求の政治的決定である。”（2）この声明は、核兵器が軍の有効性によって判断される運命になっている国を処理した。それはドルスの、“最も横柄な要求の政治的決定”を“他の軍用品として使用できる”と比較した、“間違った相違”を処理した。私は特に“危険でいっぱいの19年”に感心させられた。アメリカは19年間、ドルスのアメリカの核兵器に関する場所を自由にしてほしいという誘惑に耐えた、ということをジョンソンは暗に示した。彼はアメリカもしくは集団的にアメリカと他の核兵器を持つ国は19年以上、不使用の核兵器に投資し、お金を貯めていたことをほのめかした。そして核兵器の強制的隔離状態のその19年間は、政治上最も難しい要求である核兵器の使用を決定させるものの1つであった。

　それは、単に“通常核兵器のようなものはまったく無い”という文字通りの意味かもしれない、とここで一時休止してよく考える価値がある。もっと正確にいえば、原子力によらないとみなされる第二次世界大戦での最も大きな非核爆弾より少しも大きくない核爆弾、もしくは海中の遠くの潜水艦に対して使用する適度な爆発物の力、戦車が前進するのをやめさせるためや、山道に地滑りを起こす原因にするための地雷の核の深刻さの変化はできないだろうか。その時話し合われたのであるが、ディエンビエンフーで攻められたフランスを救うために3つの“小さな”原子爆弾を使うことはなにがそんなにおそろしい事なのか。台湾の湾にいる共産主義の中国の侵入小型船隊に対して核の助骨のミサイル発射台を使用することは何がそんなに悪い事なのか。

　その質問で受け取った２つの答えがある。１つは主に本能的に生じ、もう一方はやや分析的である。しかし両方とも信頼、もしくは核兵器はただ単に、そして一般的に違うというやや分析を越える感情次第である。より直観的な返答は、おそらくもっとも明確に述べることができるだろう。“もしあなたがその質問をしなければならないなら、あなたは答えを理解できないだろう。”全ての核兵器の一般的な特徴は、論理学者が原始関数や原理と呼ぶくらい簡単である。そして分析は無意味なくらい無駄だった。

　一方、より分析的に返答は法律上の推論や外交、取引論、そして個人の規律を含めた訓練や規律の論から論争を繰り返した。この論争は輝く線や、つるつる滑る斜面、しっかり定められた境界線、そして伝統と信じて疑わない慣習が作られた要素を重要視した。（“ほとんど飲まない人とアルコールを回復する推論は時々聞かれる。”）しかし、いずれの論争の線も同じ結論にたどり着く。かつて戦争に導入された核兵器は、抑えられ、制限され、限定されて使用できなかった、もしくはおそらく使用できなかった。